平成 20 年４月９日
19:00～21:00
前原暫定集会施設Ａ会議室

第７回（仮称）小金井市芸術文化振興計画策定委員会
［議事録］

次第
１．今年度の計画策定の予定について
２．昨年度の論議から見える問題点と解決策について
３．平成２０年度芸術文化市民講座について
４．その他

＜資料＞
１．（仮称）小金井市芸術文化振興計画策定委員会　～今後の予定～
２．今まで出てきた意見（資料１）
３．平成２０年度小金井市芸術文化市民講座案
　「芸術文化を書くこと／伝えること講座」（資料２）
４．市民講座ブログ（資料３）
５．第６回（仮称）小金井市芸術文化振興計画策定委員会議事録

［計画策定委員］
・大久保広晴委員＝出席
・大澤国栄委員＝出席
・久保みどり副委員長＝出席
・池口葉子委員＝欠席
・田川尚子委員＝出席
・中野昌子委員＝出席
・増田章夫委員＝出席
・斎藤浩委員＝出席
・田中敬文委員長＝出席
・久保田美穂委員＝出席

［事務局］
・市民部長
・コミュニティ文化課長
・コミュニティ文化課文化推進係長
・東京大学大学院人文社会系研究科文化資源学研究専攻小林真理研究室

［傍聴者］　　３名

１．今年度の計画策定の予定について　コミュニティ文化課
事務局（鈴木）
事務局からです。

課長
どうも、お忙しいところをお集まりいただきまして、ありがとうございました。４月１日付で内部の異動がありました。今まで、市民部長だった上原部長が、企画財政部長に。その後任といたしまして、保険年金課長だった久保が市民部長に就任されましたので、ご紹介させていただきます。

部長
どうも、みなさんこんばんは。４月１日付けで市民部長になりました久保と申します。まだ、ほとんど引継ぎも終わっていないような状況で、今日この会議があるということでご挨拶に参りました。私も、６年ほど前に生涯学習課におりまして、その頃この文化条例の話が出てきたというように記憶しております。たまたま生涯学習課の方か

らこちらのコミュニティ文化課の方でこれを受けて、条例が昨年できまして、その後に振興計画というのをつくっていらっしゃるということ、先ほど分かりまして、本当に隔世の感があるなぁと。いま申し上げましたように、私、保険年金課の方で、いまご存知のように後期高齢者の医療制度ですとか、メタボリックシンドローム、特定健診等をやっておりましたので、まだこの辺の状況はまったく分かりません。いま資料を見させていただきますけれども、東大の小林先生のお力添えをいただきまして、皆さん、大変な作業ですが、どうぞよろしくお願いいたします。

課長
それでは、部長は所用がありますので退席させていただきます。

２．昨年度からの論議から見える問題点と解決策について

事務局（鈴木）
それからもう一点だけ、ご報告というかお願いでございます。実はこの会議、昨年は委員長の田中先生に司会進行役もやっていただきまして、こちらは、委員長なので、そのまま進行もということでお願いをしてしまったのですけれども、去年６回会議を開催させていただいて、皆様方からのご意見をいただき、進めてきて、今年度はいよいよ具体的まとめに入るわけですが、この委員会は１０人の委員さんにお願いをしております。その中で、学識経験者ということでは、学識では田中先生、それから経験者では久保田さんにお願いをしているのですが、田中委員長にずっと進行をしていただいていると、学識の部分のご意見がなかなかいただけないということに気がつきまして、昨年度が終わったあとの事務局の反省で、田中先生には学識者として専門分野のご意見を沢山いただきたいということで、田中先生とそれから副委員長の久保さんにご相談をさせていただきまして、進行の役を久保副委員長に今回からお願いをしたいということで、ご了解を得ることができました。それで、今年度は、進行役を久保副委員長にお願いしたいと思いますので、皆様ご協力よろしくお願いいたします。

久保副委員長
よろしくお願いします。

事務局（鈴木）
そういうことで、これから委員会の方を始めてください。

久保副委員長
ただいまご説明がありましたとおり、本日より、私が議事の進行をつとめて参りたいと思いますので、ご協力よろしくお願いいたします。
これより本日の議事に入りますが、まず、次第の一番、今年度の計画策定の予定についてですが、こちらをコミュニティ文化課の鈴木さんから説明をしていただきたいと思います。

事務局（鈴木）
―資料「（仮称）小金井市芸術文化振興計画策定委員会　今後の日程」説明―

久保副委員長
続きまして、事務局より昨年度の委員会での活動、まとめ等を説明していただきます。

事務局（小林）
はい。こちらから説明をいま学生の方からさせてもらいますけれど、昨年度委員会をあれだけやって、最後にワークショップ、アンケートもしました。そこで、やはり色々な意見が出てきました。かなり色々な意見が出てきましたので、それをとりあえず分類をしまして、問題点や解決策という形でまとめたものを、皆様のお手元にこの資料１という形で出しております。これを説明させていただきますが、今日これを全部やるわけではありません。この資料を見ていただくと分かるように、この一番左端のところに、「１情報」という枠があります。1枚めくっていただくと、３ページ目の左上のところに「文化から遠い人」と書かれています。それから、５ページ目になりますと、やはり一番左のところに「場がない」ということが書いてあります。それで、この「文化から遠い人」と「場がない」という問題については、５月、６月に行いたいと思っておりますけれども、すでに問題点や解決策が出てきておりますので、そこは次回までに予習してきていただくという形にして、今日は、この「情報」の部分のことを、一度事務局の方から、どういう問題点が出ているか、どういう解決策が出ているか、ということをご説明申し上げます。その後に、「その解決策が出されているけれど、それで本当に良いの、本当に」とか「それはどのようにやっていったら効果的にできるだろう」とか、そういうところをより具体的に話を詰めて考えていけたらと思っております。それでは、お願いします。

事務局（中村）
—資料１説明—

久保副委員長
グループ懇談にするんですよね。

事務局（鈴木）
そうですね。では、その辺の説明をよろしいですか。

事務局（小林）
はい。皆さんいきなり意見を出すっていうのは大変だと思うのです。まず３人ずつくらい、その辺りを適当に分けていますから、１０分くらい、「こういうところが足りないかもね」といったことを、一度グループで話した方が意見が出やすいと思うのです。その緩衝材として、学生も入れますから、１０分くらいです。

—グループ討議—

久保副委員長
では、そろそろよろしいでしょうか
では、いま話し合ったことをまとめて発表とかいうことではなく、自分の意見として今まで出たことと重なってもかまいませんので、いまの延長の感じで話していただければと思います。では大久保委員から。

大久保委員
はい。情報をどうするかというのは、たぶん小金井市レベルでなくでも、じゃあどこ

かで成功例があるかというと、とても難しくて、例えば国の、文化庁のホームページを見ても、東京都のホームページを見ても、そこに何が書かれているわけではなく、例えば吉祥寺でも、「週刊きちじょうじ」で吉祥寺の情報が全部網羅できているわけではないですよね。皆そういう様々な媒体の中から、雑誌とかインターネットとかを使って、なるべく自分でアクセスをしていると。そういう状況で情報をなかなか集約するということ自体があまり意味をなさないと僕は思うのです。なので、ここでもちょっと出たのですけれども、例えば情報を自分で取れる人は、もうできれば、いまある色々なメディア、例えば検索方法を使ったり、様々な方法で、ある程度自分でとれるので、そういう人が何かわざわざアクセスするものを行政がつくる必要はないのではないかと思うのです。必要とされるのが、情報を･･･特に芸術文化に関する情報を探している、もしくは自分で見つけようともまだしていない方に、どうやってアクセスするかという方法で、そこについて言えば、一番良いのが、市民全体に知らせる方法、しかも比較的高齢者とかのことを考えるなら、市報を何か･･･特に市報について言えば、いまある市報の形では情報は伝わらないので、だからそれは市報を配るときに、別のものを配るとか、市報自体を全然形を変えてしまうことができれば、それはできるのではないか。そんなふうにも思うので、現実的なことを言えば、１つは何か情報を集めるということよりも、発信する媒体としては市報が良いのかな、と。市報なので、そうすると市側が何か情報を発信するためにあるその情報は、どうやってそれを掴むかということになれば、それを全部申請してもらわなくても･･･ここにもありますけれども、コンシェルジュみたいな人がいて、まちのあらゆるものを見て、決して自分で「それが良いよ」と言ってこない団体でも、こんな面白い団体がいて、こんな面白い画家がいますというのをその人が見つけてきて、それを市報で紹介することができれば、色々なところまで目が届くのかなぁ･･･と。私はそんな感じです。

大澤委員

３人で話していたので、大久保さんとほとんど内容は同じなのですけれど･･･。

私事なのですが、今日の昼間、よその土地から小金井市に越してきたという親子が来て、小学校１年生の子がおはやしに入りたいということで、若いお母さんが電話をしてこられて、どうやって知ったのですかと聞いたところ、市役所に連絡した、と。そしたら、２、３件色々と回されて、やっと教えていただいて、かけさせてもらった、お話しをしたのですけれど、いついつやるかとかお話をさせていただいて、その後に、こういう小金井市ではどのような団体が、こういうお囃子とか芸術文化のこういったことがあって、催しものが何月何日にある、というようなことが一目瞭然に分かる何かないですか、という話になって･･･いま私はこういう係・委員会をやっているというお話しまではできなかったのですけれど･･･（笑）やはり若い人でも、こう芸術とか、こういうものってお年寄りしか、圧倒的に･･･というイメージがあると思うのですが、若い人なんかでも、おはやしをめがけて、ということはないと思うんです。ただ

どこかで（お囃子を）見る。例えば先週あった桜まつりとか、お月見の会とか、小金井市でやっている催しものだったり。そういうところで見て、「あ、あれ何だろう」って言って、「お囃子っていうんだよ」って、じゃあどこでやっているのか聞いてみようとかっていう、そこからまず興味になると思うので、まずその･･･前からの一番最初の話にもどってしまうのですが、どこで何を聞けば、ここでどういうことをやっているとか、そういうものをしっかり決めた方が良いということ。

あと先月、最後にここで皆さんと一緒に食事会をしたときに、一般市民の参加していただいていた方にお話を聞いたら、やはり同じことを言っていて、こう言うと少し口が悪いのですが、「何があるか分からないのに、ねぇ。意見を言えるかよ！」なんて、言っていましたけれど、やはり小金井市に何がどういうふうにあるか分からないのに、何かきれいごとだけ先へ先へといってしまっても分からないと。私も個人的に名刺を交換させていただいて、小金井市の中の尺八をやっているとか、三味線をやっている方と名刺を交換させていただいたのですけれど、「名前を聞いていたけれど、初めて見た」とか、最近ですが、どこでやっているのか知らないとはっきり言われたりもしましたので、やはりそういうのは、はっきりした方が良いということ。

あと市報も、小金井市から出ていまして、私たちも活用させて、利用させていただいていますけれども、一番肝心なところを書こうと思うと、うちの事務に、「会長さん、すみません、字数がオーバーしています」って言われて「何とか入れてくれ」って言うと「いえ、決まりですから･･･」って言われて、一番肝心なところで切れてしまうんです。だから、もう少し、そんなに長くしたいというわけではないのですが、一番ここを知っていただきたいとか、年齢もこういう年齢層の人に･･･っていうところで「はい終わり」ってなってしまうので、もう少しうまく活用させていただきたいと思います。

田川委員

拠点づくり。そういう情報を、やりたい人、あと出たい人の拠点づくりをした方が･･･まとめるところがあって良いのではないかということ。

というのは、この間の桜まつりがどこの主催ですか、ということになったら、観光協会で、チラシが入っていたり、非常に目についたのですね。あれだけ人が集まるっていうことで、そこの催しものはどういう基準であのように出場されているのかと商工会に伺ったら、あれはたぶん観光協会の方がそういうルートを持っていて、決めたんじゃないかということだったのですが、そうなると、商工会、観光協会すべてを網羅できるような拠点づくりみたいなものが必要ということ。

それからもう１つ、いま大澤委員がおっしゃった貫井囃子の宣伝、広報ですけれども、貫井囃子の組織というか、そこで広報みたいなチラシは作らないのですか。市民の掲示板みたいなものがありますよね。そこに小金井全部の掲示板全部を貼っても、かなり宣伝になると思うのですけれど･･･。これをやっているから興味のある方は入りませんか、学びませんか･･･っていう。というの

は、うちの老人クラブでは、広報しなければ、全然分からないんですね。だから市民の掲示板とか町会の掲示板に、こういうことをやっていますから、６０歳以上の方、５０代でもかまいませんということで、うちのクラブでは年間に３回バージョンアップして貼るんです。それで皆さん入っていらっしゃる。そういう組織があって、文化部門、運動部門、色々なのをやっていますけれども、分からないんです。ほかから入ってきた方ですとか、あるいはいま団塊の方でお仕事をしていらして、さぁ、退職をしたから、何をやろうかっていってもそんな老人クラブがあることは知らないし、ましては「老人クラブ」なんて書きませんから。もっと洒落た名前でするわけですから。そういう意味で、貫井囃子も宣伝したら良いのではないかなと思うんです。市報に任せるのではなく･･･。

中野委員
もう有名ですから･･･。

田川委員
でも、そこに入れるかななんて分からないと思うのですよ。そういうのは、特殊にやっている方だけがやっているのかな･･･とか。

大澤委員
それは、この間の桜まつりでも色々な方に聞かれまして、「どのような方がやっているんですか」とか。

田川委員
そうですよね。だから積極的に広報をされれば、伝統文化もずっと続いていくのではないかな、と思うのですが。

増田委員
すでに皆さんが言われたのとそんなに変わらない話をしていたかな、と。こちら３人では、市の情報はどうかと、先生の話から始めまして、現状はやはり市報、それから市の掲示板、それからホームページの３つでしょうか。それから市民掲示板。これは自分で貼るのですけれども、それを貸してくれる。掲示板の方は市内で１１０箇所くらいしかない。あとは、どのようなのがあるかという話で、地元に「小金井新聞」･･･ちょっといま休んでいるんですよね。あれは、読売新聞の折込みで入っているのですけれども、大体２万５，０００部ぐらいは出ているのではないか。それを我々も活用したり。あと、純粋なタウン誌。「武蔵野から」ですね。あれは、小金井だけの情報ではなく、周辺もですけれども･･･ほかで、新聞の「多摩版」に載せるとか、あとは朝日タウンズ、あれが２５万部くらいで、ひじょうに効果がある。我々は活動をしている団体ですから、どうやってお客を集めるかという、そういうところになるべくお金を使わないで効果的に情報を届けるという、これはしょっちゅうやっている。展覧会なんかで言えば、それは公なものですけれども、あとはやっぱり自分が･･･例えば出品している人が、個人個人が情報を発信しないと、お客に伝わらない。それから、展覧会では、はがきをつくるわけですけれども、ちょっと大きな展覧会では５，０００部くらい、１人当たり５０枚くらいは渡している。その人が自分でお客を呼んでこないと

来ませんよと。そういうのが何回か重なってると、それも１回で済むのではなく、それが５回、１０回となっていくとだんだん定着してきますから、最初の３回とか５回では結果見るのは非常に難しい。１回目でぱっと集める人は、よっぽど魅力ある企画と言いますか、それは企画の内容によって変わりますけれども、それはもうブームになっているものとかそういう企画をすればかなり。和太鼓を１０年位前に、いまもやっていますけれども、１回の情報で、新聞にも載りましたけれども、満席になるくらい来ましたから、１，０００人以上来ましたから、しかも雨の日に･･･ああ、これはすごいって、やってみて初めて、市民の関心があるんだなぁと。私はどちらかというと、自分で発信して、情報を届けることをどうやってやるかという･･･ただ、これは条例というより個人の努力になりますけれども、じゃあどこまでこの市の公の場を使ってできるかという問題ですよね。
いまのところ、市報に載る場合は一般的には市の後援をとるんですよね。教育委員会ですとか、小金井市の後援をとって、その上で載るときちんと載りますけれども、なかなか載せてもらいたい団体が多いので、後援をとらないとスムーズに載らないとは思うのですけれど。ですから登録している団体が中心にどうしてもなっていってしまう。我々は芸術文化団体なのですけれども、生涯学習団体の登録もありますし、そちらの登録からやるんですね。実は小金井の市民コミュニティ文化課の方はそういう登録について何も集めてませんから、後援をとる場合は、企画課に話すか、こちらをとおして企画に話すか、それで小金井市の後援をとる。企画課小金井市後援ですね。だから教育委員会も小金井。そういう形で市報に載せる場合も、けっこうそれなりに面倒くさい。有料の場合やタダの場合。あれが年をとってくると皆さん大変なので･･･。終わると報告書や、有料だと決算書に予算書ですよ。非常にこれは、慣れないとちょっと大変だなぁと。これはたぶんどこの市も一緒でしょうけれども、そういう部分もありますので、わりと手間もかかったわりには効果もあがらない･･･。それを日々やっている人も中にはいます。まとめがないのですが、また田中先生にお願いします。

中野委員
いま、増田委員が全部おっしゃっていただいたのですけれど、情報をどうやって流すかっていうのが･･･。この間、１月号だったのですけれど、中野の方でこういう生涯学習として、色々な催し物をこのようなカラーにして出しているのを、体育館の方からもらってきたのですけれども、こういう形で出しても･･･市報だと載せきれないですよね、いまの状態では。だからもう少し半面か１枚を多くしてもらいたい、っていう声も出ているんですね。私たちこども会の方は、回覧板だけでは集まらないんです。ですから学校宛に、うちの地域の学校に、全部、１人ひとりのチラシを学校に配ってもらって、うちに帰ってもらうんですね。ですから、子どもたちは７００人、８００人という数はそろいますけれども、そういう形で一応情報は流しております。そのようなところです。あとは増田委員がお話していただいて･･･。

斎藤委員
面白いですね。皆さん、お立場があるので、持っている窓口がそれぞれ違うので･･･。商業者という話ではないのですが、やはりイベントをやろうということになると、やはりプランニングの段階では、どういう人に、芸人さんいないかなとか、音を出してくれる太鼓だとか、そういう人いないかな、とか･･･。それは、ネットで探しだとか、あと個人的に「何か、吉祥寺の駅前でやっていたよ」とか「じゃあ、今晩行って、やっているかどうか見に行こう」みたいな、そういう勢いでだいたい集めてくるので、そういうのがやはり見られる･･･それが個人情報だとかそういう問題があるということで、市の中でできるのか、あるいはどういう組織･･･第三セクターとかっていうのは少し危なさそうなのですが、ＮＰＯなのか･･･経済課関係では市と民間の中間みたいな･･･どういうふうにお金になっているのかとか分からなかったり。そういうところであれば、例えばそういうものをつくって、有料のものも出せる。たぶん市報だと、有料の営利目的のものはほとんど出せないと思うのです。市内なら、有料でも観に行きたいものがたくさんあるだろうし、ということで、半官半民なのか、裏は官が入っていても、表向きには民になっているというようなところが、ホームページ上で細かく･･･できればそういうペーパー類も宣伝を･･･。

増田委員
広告をとっているんですよね。

斎藤委員
そうですよね。印刷物は当然、そういうふうになると思うので、自分で印刷物を出そうとすると、やはりカラーでやると数十万単位、下手をすると百万単位という話になってくるから、そういうところに出せれば、「一枠何万円ですよ」ということで、見たい人たちに対して、わりとピンポイント的に関心のある人に出していける。ということであれば、こういうことをやってくれるその･･･コンシェルジュというような団体があれば、それをうまく情報を有料のもの、無料のもので市の後援をとっていれば、無料でも載っけますという、そこを後ろが補助金のようなものが出ていれば、たぶんある程度融通はきくのだろう、というようなことで、市がやるとなかなか五月蝿い方々が「おかしいのではないか」とすぐ突き上げを食らって動きがとれなくなるので、そういうような民間のコンシェルジュ風文化なんとかみたいなのがあると、こういうものがうまく発行できて、ホームページ上で、有料のもの、無料のもの･･･そこに行くと、太鼓の人たちとか、そういう情報をとりたいときも教えてもらえるし、今度は出したいときもそこにいくらかお金を支払えば、自分たちが全部やるよりはかなり割安で出すということで。こういうのは市報みたいな形で一月にいっぺん出ていけば･･･。それが、市とうまく絡んで･･･市報にこう入れてもらっていけば、だいぶ･･･「市報と一緒に入れるってことは、これは市のではないか」ってまた言う人たちが･･･そこが厄介なのですけれど、そういう文化の、うまく絡みながら、こういうものが市報の間に入って、各家庭に行けば、かなりボリューム的にもいけるのかなぁと。これで、採算を合わせ

てもらわないと困るのだろうと思うので、商業の中から考えると、こういうのをやっている民間団体があると非常にありがたいなとは思います。
今までの話と、伺っていてそんなことを感じて。市にやってくれというと、たぶん色々と制限がおきて無理なのかなぁと、そういうのを小金井新聞さんではないのだけれど、小金井新聞の文化版みたいなものが、情熱とお金をどこまで集められるのかが、企業の問題だと思うのですが、こういうのをうまく商売っていうのか、ビジネスにもっていけるパターンができれば一番良いのかなと思うのです。以上です。

久保田委員
すべて話は終わってしまったのですが･･･私も、市報を増刷したらどうとか、それを集約すると何かっていうと、既存のローテクの技術･･･だからローテクですよね、市報って。市報であるとか、掲示板とか、ホームページもそうなのですけれど、もうちょっとバリアフリーにするっていうか分かりやすくしてくれると･･･。やはり先生ともお話ししたのですけれど、新聞の折り込み広告も、伊勢丹の広告なら見るよね、って。やはり、デザインのクオリティが大事だと思うのです。掲示板も、なかなかこう暗いじゃないですか。だからもうちょっとお金のあるないではなくて、もうちょっと見せ方に工夫をすれば、アクセスが全然変わるのではないかという意味で、ローテクの技術をもっと上手に使うっていうことが１つあるのではないかということ。
お話を伺っていて、知りたい人と、知らせたい人の双方向の関係がうまくいっていないというのが１つあるのではないかなということです。だから、知らせたい人もいっぱいいるし、情報もいっぱい出ているけれど、知りたい人には届かない。そのギャップを埋めるのが、何かこう･･･市報に切抜きのところとかをつくって、それを切って、書いて出すと市に届くみたいな感じで、意外とあまりハイテクではなくて、身近な技でできて、っていうことが、もしかして工夫すると、よその市ではどこもやっていないようなわりと画期的な双方向性みたいなもの、しかも８０歳のおばあさんでもおじいさんでも、小学生でも書けるみたいなものだったり･･･というものがあるのかなって。
例えば、こういうことをやりたいっていう、返事が欲しいときとかってありますよね。教えてほしいときとかって。例えば、貫井囃子がやりたいっていう人が、どこに行けば･･･っていって何番に電話をかけるっていうような情報を探しているわけですよね。探している人が、どこに行けば分かるのっていうことを聞きたいっていうときでも良いかもしれないし、こういうことをやっていますっていうことを言いたい場合もあるし、苦情を言いたい場合もあるかもしれないし、それを別に何をっていう部分をもうちょっと厳密にした方が良いんじゃないかって思いました。
じゃあ、その受け皿を、受けた人はどうするのっていう問題も出てくると思うのですけれど、やはりその双方向性を多少ギャップをはらみながらもどうやって行き合わせることかなっていう気がします。そのことにこうでしょ、っていうのがいまあるわけではないですけれど。

久保副委員長
それは、ここでも出ましたよね。発信したい人とやりたい人っていうのをどうしたら良いのかっていうのに、何かありますか。すごく難しいところですよね。

増田委員
発信する側ばかり（笑）

久保副委員長
プロフェッショナルがいるのでしょうか。

斎藤委員
コンシェルジュというか･･･そういうのを、それをビジネスにする人がいれば、非常に助かるのですけれど･･･。

田川委員
吉祥寺の案内のコンシェルジュは、商工会の資金で、そこでボランティアでやっているんです。知り合いの税理士の人が、月に何回かそこに入るんです。無料なんですけれど、でもそこでかかる費用っていうか、そういうのは商工会が。

斎藤委員
内容によって、こういうことをやりたいんだということで、後ろのほうから商業振興にもなるから、商工会から補助金を出してくれと。商工会から出るっていうことは、だいたい市から出てきているのだけれども、間接的にそういうことで、例えば商業振興なのか、文化だったら、市の方からそういうことで出てくる。福祉だとかそういう施設は、すごく市から補助金出ますよね。そういうのはあまり表には見えないけれども、そういうのは何千万単位でどんとくるわけです。そういうのを見ると、例えば商業振興だとか、こういう文化の振興なんかにも、もっとお金を市は使って良いのではないかと個人的には思うのですけれど、部門によっては、道路ではないのですが、すごい金額が･･･！使っている方は数人なのに･･･っていう。商店街だとそういうのに頼むと、「全部報告書を出してください」って言って、何十万円ってなるのですが、こういうことに力を入れていこうっていうのであれば、補助金を出しながら、そういうのをやってくれる人を育てていくことによって、本当は最終的にビジネスになれば一番良いのですけれど、補助金をもらっちゃうとなかなかビジネスに通じなくなってしまうんですよね。

増田委員
ＮＰＯなら、できなくはないですよね。ある程度、芸術文化で、採算をとったりお金儲けをするとたぶん無理だと思うのだけれど、こういう情報をコーディネートしながらやっていければ一番良いのですけれど。それにしても、どこへ行けばというのは絶対１つあると思うのですよね。いま、交流センターの話をしていますけれども、私も交流センターの研究委員会にも入っていまして、やはり情報の問題はやはり、どこか行ったらそこへ行けば情報が全部集まっていて、自分も発信するためにも何かできるっていう。そのセンターは、交流センターの１階につくろうという話はあるのです。かなり広いスペースが１階にはありますので、あの中に、そういうコーナーをつくっ

て･･･当時はまだインターネットがさかんではなかったので、あそこにパソコンでも置いてとか、色々･･･。みんな持っちゃう時代になっちゃいましたが、まぁ、５、６年前の話ですから。実績では、もっと新しいことが色々あるのでしょうけれど、情報を発信する、そこでネットに書き込むことができたりですとか、そういう場はたぶん交流センターの中につくるしかないと思うのですよね。駅前だし。

斎藤委員
面白いなと思ったのは、カッセなんかは、あそこに入っていますよね。すぐそこの･･･シャトーの中に。誰でも行こうと思えば行ける。わりと市役所のそばだから、誰かが聞きに来たら、そこへ行って聞いてみてみたいな。わりと近場のところで･･･。

増田委員
だから、市役所も、いいんですよね

斎藤委員
ただ、民間のＮＰＯの立場にさせちゃうと、そういう市役所の中に入れるのはおかしいのではないかとまた言うから･･･。言うんですよ。だから民間のところを借りて、その借り賃は出していくというスタイルをとらないと。わりと市役所のそばの分かりやすいところの･･･「あそこのたばこ屋さんの角にあるから、そこに行って聞いてみて」っていうふうにつくられればいいのかなっていう気がするのです。

増田委員
やはり市役所は、市民が結構集まるところですよね。集まる場所っていうのは、市の場合はだいたい、店か駅か役所かっていう。我々の住宅地なんて、ほとんど散歩している人なんて１人会わないような寂しいものなのですけれど。あとは、老人会の集まりだとか、こういうグループで、塊ではあるのですけれど、なかなか流れとして、商店街とかそうはない。
では、どこが良いかといえば、駅前ですとか市役所ですとか。市役所も、できるっていう構想はあるのですけれども、その市役所はシティホール型で、３階までは市民が使う、４階から上は役所も使えばいいやっていう発想もできると思うし。･･･あるのですが、それができるというか、できていませんし。そういったものは、駅前出張所でもサテライトでも良いと思うんです。そういうものがあれば、そこへ行ってこちらも情報をそこへ登録したら、それに載せてくれる。だから市でやるとどうしても申請だったり、責任者誰だとか細かいこういうのが出てきますので、もっと柔軟な形で情報を流せて･･･。

斎藤委員
こういう広告をとって、こういうのだと２万円枠とか５万円枠で、自分の財布から出してお金出せば、領収書で終わり、と。その営業用にやっているんだということで、話をできるはずなので、そういうことでは、民間がやってくれるのがやはり一番。公共性が半分あるので、そこに補助金を出していくと･･･。

増田委員
委託、みたいな。

斎藤委員
そうですね。商店街によっては、そういう拠点がどこかにつくらないといけないとなれば、空き店舗の･･･空き店舗対策みたいな、人が来てくれますから。そういう意味では、空き店舗がある商店街は、あまり人が来てくれない商店街ですから、無理なのだけれど･･･（笑）そういうのを商店街の中にもってくることによって、色々な人が来てくれる。商業振興の核になってくると、そういう意味では、まちづくりの観点からも･･･。

増田委員
空き店舗の話は出なかったですよ。それは有効に使えれば。それでね、人は集まってくる･･･。

斎藤委員
空き店舗対策費には補助金が出ますから、やはり。

久保副委員長
では、田中委員長。

田中委員長
２つ。皆さんの話と重複するものもありますが、このグループでお話をしていたときに、私はまた違うことを言いました。
色々な情報があるのですが、市報には確かに２、３行しか出ていないのですよね。いついつ、どんな団体が何をやるのかといったことなのですが、だいたい私は知らない団体が多いので、どんなレベルなのかが分からない。わざわざ出かけて行って、無料だとしても、無料がタダだとは私は思わないのです。出かけていって、時間をかけてまた帰ってくるわけなので、そういう意味では非常にお金はかかるわけですよね。時間というコストがかかるので、決して無料ではない。そういう出かけて行くだけの価値があるかどうかっていうのが、それがインターネットであっても紙であっても分からないわけです。それを探す手段は、１つはどんな団体かということですが、団体の情報もまだそんなにあるわけではないですよね。有名な団体ならあるけれど、このくらいのレベルだろうと分かるのですが、アマチュアの新しい団体だとちょっと判断しかねない。そうすると、今日これにまとめていただいたところにあるような、その事情通･･･それを日本語では「文化担当コンシェルジュ」というように言うのだそうですが、そういう事情通の人が複数いて、その人のいるところへ行けば、少なくとも、まずその人が「ここ上手いですよ、下手ですよ」というとまた色々と問題があると思うので、「こういう団体ですよ」というくらいのことを解説してくれるようなものがないと、ちょっとなかなか参加しにくい、出かけて行きにくいなというのがあるのですが･･･。
そこで今度、２番目につながるのですが、そういった人を集めて情報を出す･･･今日ずっと議論してきたような民間の立場で情報を出すＮＰＯをつくっていきたいなというふうに思っています。そのＮＰＯが、条例に書いてあるような芸術文化の推進機関であっても私は構わないと思っているのです。そうした推進機関でそういった情報を集めて、その場所は文化交流センターの１階にあって、そこに行くと、ボランティア

でも有料でも構わないのですが、コンシェルジュっていう事情通の人がいて、例えば私が「何月何日この時間が空いているのですが、何か良いのありませんか」って言うと、「ああ、ちょうどここはこのところに３つくらい候補があって、例えば能とカラオケと尺八と･･･こういうのがありますよ」みたいなことが分かると良いんです。つまり、インターネットは便利なのですけれども、自分でぴったりした情報を調べようとすると、結構時間がかかるんですよね。それは、小金井レベルでなくて、都レベルでやろうとするとそれだけでも大変なので、やはり人に聞いて答えてもらうっていうのが、一番楽チンですよね。そういう意味では、やはりローテクっていうのは、特に初心者とか高齢者にとってはありがたいですし、忙しい人にとってもありがたいと思います。そういったものを包括した推進案をつくりたい。できればＮＰＯでやりたいとなと思っているのですけれど。そのＮＰＯが民間の機関であっても、別に市役所の中にあっても構わないわけです。あるいは市の建物の中にあったって、そういう市だってありますから、そこは市民の皆さんのご理解をいただいて･･･。

斎藤委員
私はそう思う。

大久保委員
なぜ、行政じゃいけないんですか。

田中委員長
まず、特定の判断をするとやはりまずいのではないか。例えば、この何とか団体は高齢者が何人いるとかいう情報は出せるけれど、あくまで行政の立場からは中立的なものでしょう。あるいは、今回こういう公演を何回やっているとか、こういう歴史がありますという情報は出すことはできるのですが、あなたの好みを聞いて、それにある程度合うようなことをお話しするようなことっていうのは、例えば割り入ったことであるし、その人が言ったことについてきちんと答えられるかどうかっていうのは、なかなか難しい。もちろんこれは民間であっても難しいかと思うのですが、民間の方が気楽にできるのは確か。

大久保委員
民間が自分たちの利害を考えるときに、それができますか。

田中委員長
文化コンシェルジュ、担当コンシェルジュをどこまで置くかによるわけで、さっきも言ったように複数って言いましたよね、１人の人ではなくて･･･。例えば大久保さんのように色々な芸術文化の専門家がいても良いし、一般に素人の人であっても良いわけです。そういった情報から、最終的に判断するから、責任はあくまでその尋ねた人にある。その人の責任なので、「あの人すごく素晴らしい」って言っていたけれど、全然つまらなかったじゃないか、っていったときに、市だと色々とまた問題が起きるような気がするけれど、民間だったら、情報の１つとしてとれるのではないかなぁと思います。そういうことをやっているところはないのですか。

大久保委員
実際は、窓口でたぶん対応している人がそれぞれやっているのだけれども、レジャーセンターみたいなものがありますから、そういう人たちがどこまで勧めているのかっていうのは正直分からないですね。
もしかして、担当として置かれているのはないですね。

田中委員長
もちろん、１人の人があらゆる芸術文化のジャンル・領域を知ることは不可能ですから、各分野でも良いし、色々ことを知る複数の人がいても･･･。例えば、私はあまり日本の邦楽のことを聞いたことはないけれど、例えば、初めて尺八の演奏を聞きたいっていうとき、初めて尺八の演奏を聞く人だから、素人で良いだろうっていうことで紹介されるとかえって、下手なのを聞くとがっかりして、もう二度と行かなくなる。そういう素人こそわりとお金がかかっても結構なレベルの人のを聞いた方が私は良いと思う･･･私はそういうような立場なんですね。初めての人だったら、レベル低くて良いなんて、私は絶対そうは思っていない方なので、そういうときに、ある程度のレベルで聞いて、尺八でお金をかけても良いですから、何かそういう公演はありませんかっていったときに、複数挙げてくれれば、日程を合わせて行くことはできるのですから。そういったことだったら･･･どうですか、難しいですか？

大久保委員
可能だったら、私は、そういう人が置かれるのが一番情報がやはり色々なものに対応できると思います。しかも、小金井市ってひじょうに小さくて、情報もそんなに多くはない。団体数も、１人の人が簡単に入るくらいなので、そういう人が文化担当で小さい講座に必ず足を運んで色々なものを見てくれば、たぶん２、３年もあればすぐその人の頭の中にデータベースができますので、一番現実的ですし。
なぜ、僕が行政にこだわるかと言うと、やはりお金がない中で、役人にお金が払えていないのに、わざわざそこに新しいお金、人材を使っても、一応知識を増やすだけですから、いままである人のところに入れれば良いわけで、コストもかからないし。あと特に難しいのが、いま　例えば私たちの立場ですと、自分たちの主催公演があるのだけれど、ほかのものは勧められないですよね。例えば、市が今度交流センターになったときも、たぶんその辺は少し問題になるかもしれません。例えば同じ日に違う公演があった場合に、市が主催する公演以外のものを勧められるかどうかっていう問題がありますよね。

田中委員長
そういう意味では、市の担当者でない人の方が良いですよ。

大久保委員
でも、ＮＰＯにしても、民間にしても、必ず利害関係は出てきて･･･。それこそ、つながりは必ずありますし･･･「広告出すから何かやって」とか、そういうことになってきてしまうので、なるべくそれは避けるような形をつくって･･･。

田中委員長
あくまでその人、目利き役、あるいはここで言う日本語の文化担当コンシェルジュていうのは情報の提供なんです。知りたいことを教えてくれる、判断するのは聞いた人が決めれば良い。鑑賞者が、行きたい人が決めれば良いので、そういった情報は色々あっても良いと思うのです。

大久保委員
いまの情報を２つに分けて･･･いわゆる根本的な、小金井に何が、どんな団体があるかと知りたい情報っていうのは、もうこれはそんなに５年、１０年で変わるわけではないので、これはある程度形にして、何か･･･こういう読みものでも良いですし、何か形にできると思うのです。ただ、その後の、毎回どういう公演がされているとか、こういうことがやりたいのだけれどという、そういう対応については、情報センターもあるし、人がいれば良いのかなと思います。あと、先ほどこういうのが民間の方が安いということだったのですが、この委員ではいわゆる、行政が何をすべきかということを考えることなので、例えばこういう情報誌を民間と一緒に活用してどう積極的に入れるべきだというふうに私たちが提言できるわけです。なので、入れるというのはすごく簡単なことで、実際にやっているところはありますから･･･第三セクターが、芸術文化について管理しているところがこういうのを入れているというのもありますから、予算はどっちがどう出しているのか分からないですけれども、私たちの財団も、毎回ではないですが、何回かは市に自分たちの財団の特集号を入れるっていう形をやっていますので、各自治体にとっては、もしそれが直営であっても、ＮＰＯであっても、民間が入っても、それはできるので、むしろ私たちのこの計画策定をつくるときに、それを入れさせるような形をつくっていけば、それは簡単だと思うのですね。民間が入ることについても、いま自由にやられている･･･僕もそれはどういう形でやっているのか分からないのですけれども、例えば民間と積極的に協働してという形でできるとは思うのです。

田中委員長
私がなぜ、民間にこだわるかというと、小金井市のＮＰＯ法人は、だいたい５０団体くらいある。５０あるのですが、その中に芸術文化っていう範疇に限ると数は少なくなってしまうのですが、広い意味での生涯学習とか、高齢者の地域デビューとか真剣に考えている団体もあります。だからＮＰＯにこだわる理由は、そういった民間の活動を支援したいといった気持ちもあるわけです。市はどうせ、ほかに福祉とか色々なところにお金も人も集中しなければならないことも出てくると思いますから、そういうところに余計な仕事をやらせずに、ちょっとお金があればやる気がある人は民間でも十分動く人はいますから、そういったところにやらせてみたいっていうのが、実は正直な気持ちです。それが、果たして我々の委員とか、市民の欲求にどこまで答えられるかっていうのは、これからももちろん十分に考えていかないと･･･。

久保副委員長
事務局の方からは、何かご要望等はありま

すか。

事務局（小林）
もしあるとしたら、いま具体的にどうやるかということで、こうしたら効果的なのではないかということも出てくるかと思うのです。問題点として抜け落ちていることがないか、などになります。

増田委員
もう１つ。情報も、どちらかというと鑑賞型の情報ですよね。今度は、自分が学習したり、クリエイティブな活動をしたいとかっていう参加型の情報もやはり、これも非常に大事だと。私のところは〇〇でやっているのですけれど、やはりそこそこ表に出すと、入りたいという人がかなりいますので、ですから発信しなければ、新聞に出ると、最初に出たときは東京版でしたから、３００本くらい電話があって、それから以降は電話は載せなかったんです。新聞ってだいたい１回載ると、半年くらいよその新聞社もまた来るんです。結局それをもとにテレビ局が来たり。１回掴むとだいたい５回くらいは出るんですよ、不思議なことに。日経新聞が来たりとか、ＮＨＫが来たりとか。東京って範囲ですから、すごい反響がありますけれども、小金井でやりたいっていう参加型の方の情報、鑑賞だけではなく、これは結構大事だなと。さっき大澤委員のようなやってみたい、見てみたいというような。そういう学習したり活動に参加したり、どういう団体が自分のやりたいものがそこにあるのかとか、そういう情報は結構大事かなと。だいたいどちらかというと、鑑賞型の人が多いと思うのですけれども、どうしても活動の方の場も･･･。だからそういう情報も、結構色々な団体を知っていますけれど、やはり高齢化でどうやってやろうって弱っていたりするところもありますし。ひとつ、江戸刺繍なんて、かなり高度な技術で都の文化財になって、必ず我々の展覧会に来るんです。おじいさんが来て、必ず出して、そこで何人か誘って、そういう展覧会を通じて後継者を探していたり。そこへ行くとまったく別の情報があったりしますので、そういうこともひとつ、情報の中に入れておいてもらわないと、ただ鑑賞だけでは･･･。

大久保委員
１つ質問を良いですか。いま行っている市の後援はどういう規程でやっているのですか。

事務局（鈴木）
市に、後援の要綱というのがあるんですね。その要綱に沿ってやっています。どういう基準かというと、市民生活にどのように貢献するかということが基準になっています。それから収入があるものについては、一定金額･･･確か１０万以上の収益があった場合には･･･確か１０万以上だったと思うのですけれど、それをどこかに寄附をするのかどうか、とか。そういう細かい基準がありまして、収益の事業ではないということが明らかになると、後援がとれるということになります。後援とって何かというと、チラシの方に「後援小金井市」という名義使用がほとんどですね。あとは、市報に掲載されるということと、広報掲示板に載せられる。ただ、広報掲示板が小さいので、

もう２か月ぐらい先･･･３か月くらい先に予約をとらないと、もういっぱいになっちゃっているのですね。だからあまり後援とっても特にどうっていうことも･･･そう、早いもの勝ちなんですね。ただ、皆さん後援申請は出されますね。また教育委員会は教育委員会で、申請が別になっているので、両方欲しいという方は両方出していただいてとかっていうことはあります。

久保委員
それ、窓口一本化とかはできないんですか。

事務局（鈴木）
一本で良い人は一本で良いのだけれど、２つ欲しければ、教育委員会の規程と、市長部局の規程と要綱が別になっているので、一本ではできないのですね。

増田委員
市報のカッコしている枠がありますよね、教育委員会の方が大きかったり･･･。

事務局（鈴木）
社会教育の方が、大きく場所をとれているので、市の後援をとっても、さっき大澤委員がおっしゃったように肝心なところまでいかないとか、日時と、募集･･･本当にさわりだけで終わってしまって内容までいかないんですね。社会教育の枠の方は、もうちょっと緩やかかもしれない･･･。

田中委員長
大久保委員は市報を見たことはある？

大久保委員
見ています。一応、芸術文化のところは目を通すようにはしていますけれども･･･。

事務局（鈴木）
市報も、昨年度からページ数が少し増えていると思うのです。少し増えて、字もちょっと大きくなっている。増えてますが、まだまだ足りなくて、私たちも載せたい･･･芸術文化市民講座･･･去年もやって、また今年度も５月１日号に載せるのですが、本当によく分からないものしか載らないというか、やるということだけは分かるけれども、内容は別のものを見なきゃっていう感じで、詳しくは今度ホームページ載せて、そこから･･･東大の方で詳しいものを、ブログをつくってくれましたよね、そこにリンクさせるようにできるのですけれど、そこまでつくらないと本当にさわりしか分からない。やるということぐらいしか分からない。ただものすごく、市民の人から「載せて欲しい」という要望が多いので、やはり多くなると、１つずつ、１件ずつは小さくなってしまう。広報もそれをすごく悩んでいまして･･･。

斎藤委員
市報は、アドレスを載せてくれないんですよね。電話だけですよね？

事務局（鈴木）
電話、ファックスだけ。

斎藤委員
アドレス断られたって･･･。

事務局（小林）

なぜですか？

斎藤委員
「細かくは、このホームページとかアドレスへ」って、いまはわりとそういう時代ですよね。アドレスを載せてくれないっていう話だったんですよ･･･。

事務局（鈴木）
行政が･･･私たちが頼むのも、たぶんダメだったと･･･。

斎藤委員
載っているのを見たことがないですよね。あまり。

事務局（鈴木）
たぶん、ダメだと思いますよ。

斎藤委員
載せてくれないみたいなんですよ。

事務局（小林）
広報は縦書きですか。

田中委員長
縦書き。

事務局（鈴木）
一部横書きも入っています。後援のところは横書きになっています。広報も色々研究しながら、少しずつ改善されているのですが･･･。
（事務局注：現在は掲載可能になっています。）

斎藤委員
せめてアドレスは、載せてもらえるようにしないと、行数が少なければ、詳細はここへ･･･というような。電話だと、来ると大変なんですよ。

一同
大変ですね。

斎藤委員
会社名は入れてくれないんです。商店街でも。「亀屋」って入れてくれないから、名前で「斎藤」って入れるでしょ、そうすると店に「斎藤さん」っていうから、（店の）新しい子は「ん？誰かな･･･」って（笑）

大久保委員
田中先生、聞いて良いですか。ここに学校のことが書いてあって、（傍聴席に）大学生もいらっしゃるので、学校との連携っていうのは、情報についていえば、例えば大学同士でも、すでに芸術関係の情報を交換しているとか、大学がもう集約されているので、そこを市がつなげば良いとか･･･まったく集約されていないというような･･･。

田中委員長
少なくとも、芸術関係同士で何かやったというのはないです。ここにあるように、はっきり言って、学芸大学の一部の中に美術とかっていうのはありますが、それは全体でいうとそんなに大きなシェアではない。あとのところも、別に芸術という名前がついているわけではないので、いまの段階では、芸術という形で何かキーワードにしてつなげて何かやってということは、私の認

識ではないと思うのですけれど･･･そうですよね、学生の方々？　ほかの大学とのものを１つのところでつなげてやっているという･･･。

傍聴（学生）
ないよね･･･。

田中委員長
環境系とか、子どもサークルとか、色々話は聞くことはあるけれど。例えば、学芸大のホームページから、ここに書いてある４つないし５つくらいの機関につながって、芸術文化だけ分かるようなもの･･･。いまのところはないです。

大久保委員
例えば、学生さんのサークルでも、活動でも、授業の中の一環でも良いですけれど、小金井市の芸術文化を広めるような、例えばフリーペーパーづくりとか、市報をつくるときにはデザインをやってもらうとか、何かそういう形で協働ができれば本当は良いのかなと。

田中委員長
例えば、市の５０周年でしたっけ･･･シンボルマークは、学芸大の美術の学生がつくったものなのですが。

事務局（鈴木）
そうなんですか？

田中委員長
そうです、確か。大学院生だったかな･･･。

久保田委員
このマーク、ついていましたね。そういえば。

増田委員
あれは、公募でやったんでしょう。

斎藤委員
公募ですね。

田中委員長
そういう意味では、やれることをやる人はいるんですよ。まだ、ピンポイントで大学同士で何かやるというのもそうですし、大学の中でも、何か小金井市のものについて協働してやっているという感じではまだないんです。

増田委員
公開講座みたいなのはやっていますよね。

田中委員長
やっているかもしれませんね。１つ１つの研究室で、その公開形式とか、例えば環境とかまちづくりという形でコミュートすることはやっている。そういう状況です。

久保副委員長
ありがとうございます。活発なご意見をありがとうございました。
時間もありますので、これで情報に関する議論を終わってしまって良いですかという感じですが、一応本日は終了にしたいと思います。
次に、議題の３の市民講座について、事務局から説明をお願いいたします。

３．平成２０年度芸術文化市民講座について

事務局（佐藤）
２つ資料が入っているかと思うのですが、１つがどういうことをやるかという概要の紙と、もう１つがブログをつくっているのですが、そのブログのトップページになります。こちらはカラーのサンプルもありますので、回して見てください。
この講座に関して、簡単に説明させていただきますが、昨年市民講座をやったということと同じような流れで、今年は平成２０年度の小金井市芸術文化市民講座案というのをつくるのですが、この「小金井発！芸術文化を書くこと／伝えること講座」というのをやろうと思います。まさにいま、お話にあったように、情報の問題というのは、条例をつくる段階からかなり問題として出ていたので、その解決であったり、きっかけを与えるという講座がつくれないかということで、この「芸術文化を書くこと／伝えること講座」をつくりました。
目的ですが、「芸術文化を書き、伝えることのできる人材を育てる」としています。ここのポイントは「人材を育てる」というところで、情報誌をつくるということは可能ですし、ブログで書くというのは、いまは誰でも書くことができるのですが、じゃあ、ちゃんとその情報を伝えることを書く人が育っているのかというと、なかなかできないと思うので、そういうのを育てる講座をやろうと考えました。
この講座では、「芸術文化活動を言葉で表現できる人材の育成」を目的としてやります。展開としては、言葉で表現するという大きな話から、具体的にどうやって伝えれば良いかというメディアをつくる話まで、１０回を通じてやります。１０回を固定メンバーでやろうと思います。それで、最終的に参加した人が自分で何かを書いて、何か自分の伝えたいことをちゃんとした手段で伝えられるようになるっていうことを目的としてやります。ポイントですが、これもタイトルに入っているとおり、まず書くということは必須というか、実際講座をやる中で書いていきます。一方で、誰に対して書くのか、何を誰に伝えたいのかっていうことを気をつけながら書くということをやろうと思います。最後に、これはタイトルに書いてある「小金井発」ということなのですが、書いたものを小金井から発信するならどういうかたちで発信できるのだろうとか、そういうところからも考えていっても良いかなと思い、ここがポイントです。
次のページを開きますと、概要があるのですが、（実施は）金曜日の夜です。この委員会と同じような時間で、１９時から２１時まで２時間やろうと思います。それで、６月６日スタート。受講料は無料というかたちにしますが、教材費であったり資料費として各回５００円。定員は２５人。固定で１０回やります。

中野委員
これは、１０回出ないといけないのですか。

事務局（佐藤）
もちろん。そこは予定を調整していただいて･･･。

増田委員
「人材育成」ですから。鍛えていかないと。

事務局（佐藤）
そうですね。人を育てることこそ時間がかかることなので･･･。でも、それこそやるべきことなのではないかと思ったので。ここでも書いたとおり固定メンバーでがっちりやるということで、全１０回を通してやります。
１０回どのようにやるかといいますと、最初の３回で、言葉で表現するというのはどういうことかというところから入りまして、次に言葉で芸術っていうものを表現するにはどうすれば良いかということを考えます。最後に３回、具体的にどういう媒体に載せてやれば良いかということを具体的につくる作業をして、最後の１０回目に、会を開いて、「私たちはこういうことをやって、こういうことを書きました」であったり、「こういう成果がありました」っていう発表会を１０回目にやろうと思います。
というのが、だいたいの展開で、ここまでだとスケジュールしか分からないと思うので、具体的な中身を見るときに、講師の人の紹介をしようと思うのですが、まず１回目。３回書くということをやるのですが･･･武田徹（たけだ・とおる）さん、ジャーナリスト・評論家・メディア社会論研究とあるのですが、彼は自分で書くという作業をしていたり、ジャーナリストとして記事を書いたりしているのですが、一方で、大学でジャーナリスト養成講座であったり、学生が書いたり情報収集をどうやったら良いかという表現教育のようなこともやっている人です。この人にお願いをして、「書く」ということはどういうことかっていうことをお願いしようと思っています。言葉とか書くということはどういうことかっていうことをきちんと語ってくれる人だと思います。
次に「芸術を伝える」には、津田広志（つだ・ひろし）さん･･･アートエディターと書いてあるのですが、今年３月までフィルムアート社という、芸術関連の本を出版する会社の編集長をやっていらっしゃる方で、小金井在住です。彼にお願いをして、色々なアーティストの本であったり、本を作ってきたなかで、芸術をどういうふうに言葉にすれば良いのかということを、これもまた３回続けてやろうと思います。
最後に、書くということが分かったときに、どうやって書くかというときに、３回入れたのですが、まず１回目に大久保委員にお願いをして･･･これは、ご紹介をするまでもないかと思うのですが･･･今まで皆さんに見ていただいたように、チラシでどういうふうに伝えたら良いのかということをお話ししていただきます。次に「申請書」の書き方･･･先ほどフリーペーパーのお金をとってくるという話があったのですが、やはり自分が何かをやろうというときに、人にこういうことをしたいんですというときに、どういう文章を書けば良いのかということを企業メセナ協議会の若林朋子（わかばやし・ともこ）さんにお願いします。企業メセナ協議会は芸術の団体やアーティストと企業の間をつなぐ団体で、常に企業に対してどういった言葉を使って話したら良いのかといったことをやっている人なので、そういう申請書の書き方の話をしていただこうと思います。最後の講師が、「週刊きち

じょうじ」編集長の大橋一範（おおはし・かずのり））さん。この「週刊きちじょうじ」は、現在で１７３８号くらいまで出ていて、３０数年やっていらっしゃる方で、パソコンが出る前からこういうものをつくっていて、パソコンを段々使うようになって･･･とすごく長くやっている方なので、そういう方にフリーペーパーとか紙媒体でつくるものはどうすれば良いかという話をしていただこうと思います。
講座の中で書いたものなどは、１つにまとめて、さらに紙媒体で１つの成果として発行しようと思います。それで、成果発表会という形でやろうと思います。
以上が概要ですが、それを広報するのに、市報にも載せるのですが、一方でこの資料のようなブログをつくっていて、そこにアクセスすると、講座の趣旨が分かるとか、申込もここでしようと思います。まだ展開は分からないのですが、ここで受講生が書いたものを載せるとか、小金井の情報を載せるとかそういう１つの拠点みたいな形でも発展していけたら良いんじゃないかなというふうに思っています。
･･･だいたい説明は終わりましたが、もし質問があれば、お受けいたします。

田中委員長
どういう人が来るというように想定していますか。対象は一応書いてありますけれども･･･。

事務局（佐藤）
はい。やはり時間が、１０回固定で金曜の夜ということで、学生が多くなってしまうのではないかとは思いますが、それでも実際に表現をしている人、ＮＰＯのスタッフ、行政の職員とも書いてあるのですが、そういう方にも来て欲しいので、そういう部分にも広報をかけていこうかと思っています。あと、対象は市内外を問いません。

事務局（小林）
個人的には、若い人たちはアクセスしてくれると思うのです。ただ、もう少し年齢のいった方で、先ほど増田委員もおっしゃっていましたけれど、自分から発信していくということをを今までもやってらして、もう少し質を高めたいと思っていらっしゃる人などが参加していただけるといいなと思っています。若い人たちだけだと偏りが出てしまうのです。「少し頑張ってやろう」と思えるような団塊世代以降の方たちなども入っていただけるといいかと思います。

事務局（佐藤）
もちろん、委員の皆さんも。
増田委員
さっきの情報の話の中でも言ったように、補助金を集めるとかメセナだとか、福祉の方はそれで入っていますけれども･･･こういう助成金をどこどこのところの団体に充てますといったような。それも１つの情報として大事なことなので。お金がともかくかかるんです、芸術文化活動には。自分で集めるということを公表しないと、できませんので･･･。そういう意味ではさっき言ったような助成金だとか、行政だけではなくてありますから、そういう情報も大事かなと思います。

事務局（佐藤）

ぜひ、広報にご協力をお願いします。
５月１日には、市報に載りますよね？

事務局（鈴木）
はい。市報は５月１日で、募集は翌日、５月２日からになるかと思いますが、それからホームページにも載せます。ホームページは、こちらの可愛い象が載ったのとリンクできるようにしたいと思っております。

久保副委員長
質問等は･･･ないですか。
では、次回の日程を確認しておきたいと思います。
次回は、少し時間が空きますが、５月の２８日水曜日。１９時からになります。今日は情報のことを中心に議論を進めましたが、次回は、今日いただいた資料の中の「文化から遠い人」についてですので、予習をしてこれると思いますので、色々考えて来ていただければと思います。
では、以上で第７回小金井市芸術文化振興計画策定委員会を終了したいと思います。
ありがとうございました。